

## ケアする人と世界疎外

對馬果莉

### はじめに

本稿の目的は、政治思想家ハンナ・アーレント（1906-75）<sup>1</sup>の労働論と世界疎外概念を参照し、ケアする人の苦境の背景にあるものを明らかにすることである。子育てや介助・介護、看病などのケアは、あらゆる人がそれなしには生きることができない重要なものであるにも関わらず、これまで社会的にも経済的にも正当な評価を受けてこなかった。こうしたケアとは、例えばケア倫理学者のエヴァ・フェダー・キテイが定義しているように、それなしにはその人が生きていけないようなニーズに応えることである [キテイ 1999 = 2010: p. 1/29 頁]。本稿では、無償でケアをする人の困難が、有償でケアをする人の労働環境の問題にも深くつながっているという観点から、有償か無償かを問わずケアする人の苦境について扱い、特に、私的な場面において無償でケアをする人の苦境を明らかにすることに重きを置く。近代労働論において生産労働が中心とされ再生産労働が周縁化されてきたことに対して、アーレントの労働論を援用して、生産労働に対して根本的な批判を行なう意図を持っている。保育・介護分野の労働力不足の背景には責任の重い仕事内容に対して低賃金の問題があると指摘されるようになって久しいが [花岡 2009, 益山 2016]、ケアする人の労働環境には現在に至るまで問題が山積している<sup>2</sup>。誰かをじかに「幸せ」にすることができるこの重要な営みが、なぜこれほどまでに困難なのだろうか。無償でケアをする人の苦境を改めて見直すことで、有償でケアをする人までが経済的・政治的に困難な立場に置かれ続けている問題に歯止めをかけるためにも、その端緒を明らかにしたい。

アーレントは、カール・マルクス（1818-83）の思想を批判的に検討しながら、労働や世界疎外について論じた。マルクスは、労働に人間の本質を見だし、労働力こそ資本主義における富の源泉だとしたが、それは物質的な財貨を生産するもの、つまり生産的労働が第一義的に意味されていた。それに対してアーレントは、労働を生産活動ではなく、生命維持のための消費活動として位置づけ、人間らしい生は労働からは得られないと批判した。また、労働における疎外を、自らの労働力がつくり出した生産物やその利益と繁栄からの疎外として問題化したマ

ルクスに対して、アーレントは、他者との関係性を絶たれるという意味で世界からの疎外だと論じた [HC: p. 254/411 頁, Va: S. 325/335-6 頁]。このようなアーレントの主張は、労働を蔑視する前近代的で懐古趣味なものに聞こえるかもしれない。しかし、ケアという視点からアーレントの労働論を読みなおすと、ケアがなぜこれほどまでに労苦を伴うのかクリアに見えてくる。

従来の先行研究において、アーレントとケアを結びつける研究は極めて少ない。その理由として考えられるのは、後に論じるように、アーレントの公／私の領域の議論が、女性を政治から排除する伝統的な政治理論を無批判に継承するものとして映り、特にジェンダーの視点から批判的に検討されてきたことである。しかし近年、アーレントを援用してケアを論じたフェミニストによる研究が登場し始めている。例えば、新自由主義的なグローバル経済の下で、公共性のあるものが急速に市場化され、弱体化していくことに対する問題意識から、アーレントの「世界への愛」の議論を援用して、公共的な世界に対するケアの民主主義的倫理について論じたものや [Myers 2013]、公共的なもの (public things) に対するケアについて論じたものがある [Honig 2017]。また、グローバル経済によるグローバル・サウスの特に女性たちに対する搾取が及ぼす影響を、アーレントの「世界疎外」によって論じたものもある [Luttrell 2013]。しかしこれらの研究では、アーレントの「労働」ではなく「仕事」とケアを結びつけており、さらに私的な領域におけるケアではなく、公共的な世界に対するケアに焦点が当てられている。日本におけるアーレントとケアの先行研究としては、マルクス研究者でもある佐藤和夫による、アーレントの労働にはケアが含まれており「労働の恩恵」として肯定的な面があると指摘する研究があげられるが [佐藤 2017]、佐藤はアーレントの労働概念の中心にあるケアとその苦境を主題化しているわけではない。管見のかぎり、アーレントの労働概念の中心にはケアの諸活動があることを指摘し、この労働がもたらす世界疎外の危険性について論じたものはこれまでにない。本稿では、ケアする人のための環境に欠けているものは何か、社会はどのように変革されるべきなのか。このような問題意識の下で、ケアする人の苦境に向き合いたい。

まず、アーレントの労働論と世界疎外概念の特徴をしっかりと把握するためにも、マルクス主義フェミニズムが主題化した家事労働と「搾取」の問題と、アーリー・ラッセル・ホックシールドによって概念化された感情労働と「疎外」の問題について確認したい。これらの議論は、他者のニーズに応えるというケアの営みが伴う二つの「痛み」を非常によく明らかにしてきた。これらの「痛み」とは、資本主義の物質的基礎として搾取される家事労働を担うことによって経済的な打撃を受けること、加えて時には睡眠不足と腰や膝、手への負担によって身体的損

傷を受けることによる物理的な「痛み」と、感情に市場価値が付与されることで、他者のニーズを想像し、配慮する際に、精神的に摩耗させられるような心理的な「痛み」である。本稿の構成としては、まず第一節で、近年、ふたたびマルクス主義フェミニズムへの関心が高まっていることに注目する。マルクス主義フェミニズムの無償労働論は、多くの女性たちが家庭内で家事や育児などの活動に無償で従事することで、資本と家長から二重の搾取を受けていることを可視化したところに多大な理論的貢献がある。初期のマルクス主義フェミニズムは、必ずしも労働を生産労働に限定しておらず、経済的なものから文化的なものまで幅広い労働概念を持っていたが、その後の理論的展開の中で、拡張された労働概念を維持することができなかったことを指摘する。第二節では、ホックシールドによる感情労働を取り上げる。ホックシールドが感情コントロールを伴う賃労働の特殊性を明らかにしたことは画期的であり、とくに看護職や介護職におけるバーンアウトのメカニズムを言語化することや、サービス業における労働環境の向上に資する議論をもたらした。しかし、彼女の感情労働論における疎外はマルクスの自己疎外をベースに論じられているために、私的領域における疎外を言語化することに困難を抱えている。第三節では、まずアーレントがどのようにマルクスを批判しながら労働や世界疎外について論じていたのか確認する。その上で、ケアする人の苦境とは、ケアする人は誰かのホーム（安心できる環境）をつくり出しているにも関わらず、自分自身はそのホームを持つことができないままにされているという倒錯した状況が生みだしていることを明らかにしたい。この倒錯した状況は、ケアする人が、私的な場所で自分自身の健全さを維持し、公共空間で自身の力を発揮するという個人の潜在的な自由に対して大きな脅威となる。一、二節の議論を経ることで、アーレントがマルクスを批判しながら提示した「世界疎外」というオリジナルな概念が、「搾取」や「自己疎外」といったマルクスの概念を借用した分析では十分に明らかにされてこなかったケアする人の苦境を浮かび上がらせることができる。ケアする人の苦境を世界疎外として捉えなおす時、一体どのような光景が見えてくるのだろうか。

## 1. マルクス主義フェミニズムへの再評価

マルクス主義フェミニズムの理論的な先駆性は、これまで主流の経済学の中で家事や育児などのケアは、交換価値を持たないために労働ではないと当然のように論じられてきたことに対して、ケアを無償労働として言語化し、資本と家長による二重の搾取を受けていることを喝破したところにある。ラディカル・フェミニストとともに第二波フェミニズムのうねりをつくり出したマルクス主義フェミ

ニストは、マルクス主義を批判的に継承しながら、「家事労働」「不払い労働」「再生産」などケアの営みについて考察する上で欠かすことのできない分析概念を生み出してきた〔上野 1990：279〕。

近年、新自由主義改革によって社会保障費が抑制され、家族のケア負担が大きくなる中で、再びマルクス主義フェミニズムに注目が集まっている。2004年に、マルクス主義フェミニストのシルヴィア・フェデリーチは『キャリバンと魔女』を出版した（邦訳は2017年出版）。フェデリーチは本書の中で、15世紀後半から17世紀にわたって続いた「魔女狩り」という現象が、資本主義形成に必要な本源的蓄積であったという議論を展開している。本源的蓄積とは、資本主義社会の成立過程で農地を「囲い込み」、農民から土地を切り離すことで、人々から生産手段を奪うことを指してマルクスが使った言葉である。ここで女性たちの手から切り離されて資本の原資として「囲い込まれた」ものは、「魔女」が持っていた中絶や避妊などの生殖に関する知識と、女性の性と生殖に対する自律性である。フェデリーチは、資本主義的生産様式が確立する過程で、労働者に対する搾取に先行して、労働者を文字通り「産み出す」女性の性と生殖に対する篡奪があったこと、そしてこのことが女性たちを極めて脆弱な立場に置き続けてきたことを明らかにした。

イタリアのマルクス主義フェミニスト運動と思想を日本にいち早く紹介してきた伊田久美子は、近年のマルクス主義フェミニズムに関する一連の研究の中で、マルクス主義フェミニズムが70年代初頭から既にグローバルに展開していた新自由主義的な資本主義に対する批判として多様な試みであったことを指摘している〔伊田 2015：25-6〕。彼女たちに共通しているのは、「労働」という概念を生産労働に限定せず、「市場外の、多くは女性によって担われる不払いの諸活動、性・出産・育児、さらに今日ケアと呼ばれる情緒的貢献」〔同前：26〕にまで拡張させたことである。特に、『家事労働に賃金を』や『愛の労働』を著した、マルクス主義フェミニストの先駆けであるダラ・コスタ姉妹は、家事労働を経済的なものだけに限定せず、性的なサービスや生殖、情緒的なケアなど文化的なものも含む包括的な労働概念を提示した。そして、このような家事労働が性暴力や性規範を含む様々な強制力によって整備されてきたことを指摘し、女性に対する搾取の全貌を明らかにしようとした。マルクス主義フェミニズムの貢献は、その後、ジェンダー視点から経済学を問いなおすフェミニスト経済学へとつながっていく。しかし、伊田によれば80年代半ばから「支払われる労働」に焦点をあてた議論が増えていくにつれて、マルクス主義フェミニズムは退潮していったという〔同前：27〕。その頃、世界女性会議などでは、アンペイド・ワークの測定や評価が課題として取り組まれていた。この取り組みは市場外で行われてきた無償労働を不払

い労働と捉え、経済的な価値を示すという意義があった。しかし、アンペイド・ワークを測定する際に、市場外で行われていた家事やケアなどの再生産労働を、市場における生産労働の基準によって測ることから逃れられず、家事やケアの負担が過小評価されてしまった [Himmelweit 1995 = 1996]。

伝統的な経済学における生産優位の考え方から抜け出せないのではないかという観点から、家庭内で女性たちが行ってきた家事や育児などのケアに関わる諸活動を「再生産」労働と定義することについて、これまでも疑問が投げかけられてきた<sup>3</sup>。生産労働中心の価値観によって分断させられることのない、初期のマルクス主義フェミニストが抱いていたような労働観を引き受けるような仕方、労働について語ることはできるだろうか。第二節では、ケアする人が、他者のニーズに応える時に、自身とは異なる身体・感覚・視点をもつ他者のニーズを想像し、自身のニーズや感情を調整しながら配慮する時の困難を、自身の感情からの疎外として概念化したホックシールドの感情労働の検討を通して、その功績と限界を確認する。さらに、第三節では、生産労働を中心としないアーレントの労働論を参照しながら、ケアする人の諸活動とその苦境を捉えなおしたい。

## 2. ホックシールドの感情労働における疎外

ホックシールドは、1983年に出版した『管理される心』の冒頭で、マルクスの『資本論』から、印象的な引用をしている。

私はこの子が七歳の時、この子を背中におぶっていつも雪の上を往復したものです。そしてこの子は一六時間働くのが普通でした！……私はこの子が機械についているとき、よくひざまずいて口に食べ物を運んでやったものです。というのも機械の前を離れたり機械を止めたりすることはこの子には許されていなかったからです [マルクス 2005 : 362]

この証言は、1863年にイングランドで行われた児童労働調査委員会におけるものである。ホックシールドは、19世紀のイングランドにあった壁紙工場で無慈悲に働かされる7歳の少年の経験と、20世紀の合衆国にある一流の航空会社で働く客室乗務員の経験という全く異なる経験の中に、「疎外」という共通性を見いだした。

よく知られているように、マルクスは『経済学・哲学草稿』の「疎外された労働」の中で、疎外を「労働者からの労働生産物の疎外」、「労働者からの労働の疎外」、「類的生活からの疎外」、「人間の人間からの疎外」の4つに分けて論じてい

る。マルクスの疎外されない労働においては、働くことを強制されず、働くことそれ自体がその人らしさの発露であると同時に普遍的な人間性を表わしており、働くことによって人びとと交流し、成長していくような労働のあり方が目指されていると言ってよいだろう。ホックシールドは、このマルクスの自己疎外概念を援用して、客室乗務員の労働内容を「感情労働emotional labor」という視点から分析し、自分の感情が商品化され、それを自己から切り離さざるを得ない状況を、疎外された労働として描き出した。彼女は、自分自身の感情が「ほんとうの自己」と分離してしまう状況を、「感情表現、感情経験、そして感情が私たちに教えてくれることからの疎外」[ホックシールド 1983 = 2000 : 217] と呼び、感情が道具化・商品化されて買いたたかれるリスクを喚起している。

30年後、ホックシールドは2012年版の『管理される心』に寄せた序文の中で、80年代初頭のデルタ航空の研修所で行った調査を回想し、その時とっさに手元のメモ用紙に書き留めた「感情労働」という言葉が、これほどまでに使われるようになったことに対する驚きを記している。彼女はその背景に、産業構造の変化に伴ってサービス業が増加し、人びとの関心を集めるようになったことがあると指摘している。ここでのサービス業とは、保育所や高齢者施設、病院、空港、小売店、コールセンター、教室、福祉事務所、歯科医院などの「感情労働」を必要とする職種だという [Hochschild 2012: ix]。たしかに、ホックシールドの議論を援用して、ケアの営みについて論じるものは多い。とくに、看護や介護、介助、保育の分野で働く人の燃え尽き症候群（バーンアウト）の背景に感情労働があることを指摘する研究や [例えば、荻野・瀧ヶ崎・稲木 2004]、介護労働を感情労働として位置づけ、賃金の上昇だけではなく介護労働者のメンタルヘルスへの対策を重視すべきだとする研究がある [吉田 2014]。このように、感情労働論は、本来評価されるべき感情労働を可視化し、労働環境の改善をするために有効な議論であるために、非常に大きな影響力を持っている。しかし、ホックシールドの論じる自己の感情からの疎外は、賃労働として行われる場合に生じるとされ、家庭内での無償労働をめぐる疎外を言語化できないことは、これまであまり指摘されてこなかった。

先に引用した証言からは、19世紀のイングランドの壁紙工場で働く少年の過酷な労働環境が伝わり、彼の生活を改善すべきだと痛感させられるが、それと同時に、わたしたちはなお、この少年を世話する母親についても、思いを巡らせるのではないだろうか。雪のなか息子をおぶって工場に連れていき、彼にひざまずいて食事を与えていた母親は、一体どのような生活を送っていたのだろうか。工場で酷使される息子の世話をすることが生活の中心にあったのだろうか、それとも、自分自身も同じように過酷な労働環境で働いていたのだろうか。彼女が自分

の息子に対して行っている世話は、彼の生存にとって不可欠なことであるが、彼女のこの行為はホックシールドの感情労働によって捉えることはできるのだろうか。

既に述べたように、ホックシールドは『管理される心』において、感情労働の定義を賃労働のみに限定している。賃金が発生するような交換価値を持つ「感情労働」と、同種の行為であり使用価値を持つが賃金は発生しない「感情作業 emotional work」や「感情管理 emotional management」は区別されている [ホックシールド 1983 = 2000 : 7 (注2)]。つまり、看護・介護・介助・保育を賃労働として行っている場合には「感情労働」としてその疎外状況を言い表すことができるが、賃金をもらわずに家族や身近な人のために看病・介護・介助・子育てをしていれば、それは疎外されたものではなくという議論の枠組みになっている。例えば、自身の感情からの分離は、舞台上で演劇をするときには賞賛されるべき技能になり、私的な生活においては感情のコントロールはむしろ役立つ時があるとまで述べている [ホックシールド 1983 = 2000 : 41]。したがって、先の母親の経験は、ホックシールドの感情労働ではなく、感情作業にあたり、現実化している疎外としては扱われない。つまり、彼女の議論枠組みの中で、この母親の経験を前景化することはできない。

マルクスの自己疎外概念は、壁紙工場で働く少年が自分の肉体労働の成果を搾取され、生産物やそれによって得られたはずの生命的繁栄から遠ざけられていることを焦点化し、問題にすることができる。ホックシールドの感情からの疎外の議論は、少年の疎外と同様に、客室乗務員が感情労働をすることによって自身の感情から引き離されて、表わしようのない苦痛をうけていると理解することを可能にした。しかし、どちらの疎外論においても、少年の母親が彼を世話することで置かれる困難な状況を、十分に言い表すことは難しい。ケアする人は、日常の中で、常に世話をする相手と自分自身の必要（ニーズ）を満たすために追い立てられている。そこでは、ケアする人は自己から疎外されるというよりは、むしろ、身近な他者と自分自身に絶えず直面させられている。次節では、アーレントの労働論を詳しく検討し、この母親の疎外について理解を深めたい。

### 3. アーレントの労働論と世界疎外概念の射程

公私二元論はフェミニズム理論において常に議論的的になってきた。政治や市場経済の場面から締め出され、家の中に閉じ込められて、無償の奉仕を強いられてきた多くの女性たちの経験から、公私二元論こそが、女性への抑圧や搾取の装置だと考えられたからである。特に、第二波フェミニズムのスローガンである「個

人的なことは、政治的なこと」は、女性が私的領域に閉じ込められていることに対する痛烈な異議申し立てであった。このような背景から、アーレントの公的領域と私的領域を峻別する議論も、フェミニストたちから厳しい批判を受けてきた。多くの影響力のあるフェミニストたちが、アーレントは西洋政治思想史における男性支配的な公私二元論を色濃く受け継ぎ、私的領域に対する公的領域の優位を説いていると批判してきた [Rich 1979, O'Brien 1981, Brown 1998]。たしかに、『人間の条件』や『活動的生』において、アーレントは私的領域よりも公的領域に焦点を当てた議論をしており、私的領域の主要な活動力である労働は劣位に置かれている [Va: S. 150/151-2頁]。そのため、アーレントの労働論がフェミニストたちから厳しく批判されることは、ある意味で当然であった。

しかし、彼女の近代労働批判には、生産第一主義を批判し、ケア労働こそが労働であると捉えることを可能にする視座があり、現在のケアをめぐる問題を考えるうえで、彼女の労働観は読みなおす価値がある。たしかに、アーレントは人間の生活を、労働中心で捉えることに批判的であり、労働を劣位の活動力として位置づけているが、彼女は人間の生一般を、さまざまな活動力 activity が絡み合ったものとして捉えており、単に労働が劣っていると述べているわけではない。1958年に出版された主著『人間の条件』(HC)と、そのドイツ語版である『活動的生』(Va)の第三章の中で、労働について詳しく論じられているため、この節では、これら二つの著作からアーレントの労働論と、その労働につきまとう世界疎外の状況を明らかにする。マルクスがそうでなかったようにアーレントも、ケアする人を念頭に置いて彼女の労働論や世界疎外概念を展開しているわけではない。しかし、アーレントがマルクスを批判的に検討しながら労働を論じた箇所には、ケアする人の視点からみても、その苦境が非常に良く描き出されている。

アーレントは、近代以降の労働観を決定づけたジョン・ロック (1632-1704)、アダム・スミス (1723-1790)、そしてマルクスを引き合いにだし、彼らの労働観を古代ギリシア・ローマ時代の労働観と比較しながら議論を進めている。彼らと同様にアーレントも、労働は人間が自然に働きかけ、生命維持のためのものを得てそれを身体に取り入れる、新陳代謝のプロセスとして捉えていた<sup>4</sup>。だが、アーレントの労働観と近代以降のそれとの間には決定的な違いがある。その違いは、彼女が、労働とは第一義的には消費に関わるものであり、世界の中に何か永続的な物を残す「生産的」なものにはなり得ないと論じているところにある [Va: S. 117/118頁, S. 140/141頁]。近代労働論においてロック、スミス、マルクスらは、それぞれ違った思惑をもちながらも、労働が「生産性」の根源にあると想定していた。ここでの生産性とは、私的所有物、貨幣、社会的再生産など、日々の労働が、何か蓄積可能なものとして労働の後に（願わくは永続的に）残ることを意味

している [Va: S. 119-20/119-20頁]。ロックは私的所有権を根拠づけるものとして、そして、スミスは富と資本の蓄積を可能にするものとして、労働を位置づけた。アーレントはマルクスだけが労働そのものに関心をもち、その分析をしたと評価する一方で、マルクスが陥った隘路は、ホモサピエンスという類としての永続性を、労働生産性として捉えたことだと指摘する。アーレントにとって、人間らしい生とは、類的存在として永遠の繁栄をすることではなく、個人として一回しかない人生を全うするという、生の個別性にある。そのため、人間の個別性が埋没してしまうようなマルクスの類的生命を重視する議論をアーレントは批判した [Va: S. 136/137頁]。近代以降の労働中心の人間観に対して、人間は労働のみに生きるのではないと批判したアーレントの狙いは、消費社会や浪費経済への批判へと向かう [Va: S. 158/160頁]。しかし、ケアという視点から考えれば、アーレントが労働の原型を家事やケアに関わるものとして捉えていることが重要である。以下で、詳しく見ていこう。

アーレントが近代労働論を批判するのは、人間の活動力（労働、仕事、活動、思考、意志、判断）をすべて労働に還元し、その生産性を中心に、人間の生を捉えることを疑問視したからである。人間の活動力には、それぞれの役割とその活動力に適した領域があるというのがアーレントの基本的な考え方であり、「労働」、「仕事」、「活動」の3つを区別し、その連関を論じたところに彼女の政治思想の特徴がある。アーレントは、机や椅子など長い間使えるものをつくり出すことが「仕事」であり、生産的な活動だと論じた。彼女にとって「労働」は、繰り返し行われる消費活動の一環であり、腐る前に食べ切ってしまうなければならないような食料を生み出すこととそれを消費すること、そしてその消費を助ける活動を「労働」とし、非生産的な活動だと論じた。マルクスの労働概念は、アーレントの「労働」と「仕事」を包含するものであり、またそれらすべてを生産的なものとして捉えるために、アーレントからすれば生産的なものと非生産的なものを混同してしまっている。アーレントの労働論がマルクスのそれと大きく異なるのは、労働の範囲を限定して捉え、労働の主軸に非生産的な消費活動を据えるところである。アーレントによれば、「仕事」によって生産されたものは、世界の中に何か永続的なものをもたらし、人間の公的な生活を支えてくれるものである。アーレントが生産的な「仕事」と非生産的な「労働」を明確に区別しようとしたのは、両者が混同されることで、「仕事」による成果が、「労働」の産物のように消費され、公的な生活の安定性が脅かされている状況に、近代以降の危機を見いだしていたからである。

話しを戻せば、ケアという営みを考える上で、アーレントの労働論が重要なのは、「生産的な」労働しか「労働」と認めなかった近代労働論とは対照的に、彼

女が労働と仕事を区別することで、1) 非生産的活動である消費こそが、人間の生命にとって不可欠な活動力、つまり労働であることを示したことである。労働laborが、生命維持に必要なものを常に求めるといふ終わりのない苦痛と、文字通り出産laborの苦しみ、という二重の苦境であることを明示し [Va: S. 117/117頁, S. 119/119頁]、それがこれまでどのような人に担われ、時に暴力を含む強制によって課されてきたのか明らかにすることは、ケアを論じるにあたって不可欠なことである。さらに、2) ケアする人の苦境を考察する上で、アーレントの世界疎外概念が有効なのは、ケアを担う人たちが公的領域だけではなく私的領域からも疎外されていることを明らかにすることができるからである。

### 1) 家事やケアこそが労働である

アーレントが労働の原型として想定しているのは、市場経済の中で工場労働などを通じて生産物をつくることを労働の基本に据えた近代労働論とは異なり、古代ギリシア・ローマ時代の家政や人の世話に関わる労働や、中世ヨーロッパの教区を基本とするコミュニティの中で担われてきた私的領域における労働である。そこでは、そのコミュニティに暮らす領主とその傘下にある複数の家族が生活するための農林業や畜産業、コミュニティで育てた食物の調理、暮らしの空間を清潔にたもつ家内労働、そして出産や子育てなどのケア労働、生活に必要な知識の教育などが、すべて私的領域で行われてきた。アーレントによれば、近代以前には、こうした活動こそが労働であり、家の主人は生命維持のために、奴隷や女性たちにそうした労働を強制的に担わせていた [HC : p. 119/177頁]。アーレントの労働論は、決して主人による奴隷や女性に対する労働の強制やそれに伴って使用される暴力を肯定しているわけではなく、近代以前の荘園制や古代ギリシア・ローマのような労働回帰を目指しているのでもない。アーレントが執拗に労働にまつわる隷属状態について言及するのは、その隷属状態が「自然」なものではなく他者から強制されたものであることを問題視していたからである [Va: S. 132/133頁]。

家事などの家内労働と、生殖やケア労働は、何か新しい事物をつくり出すようなものではないため、非生産的である<sup>5</sup>。アーレントにとって労働は、人間が生命維持のために行う活動である。喉の渇きを感じたら水分を取り、空腹が苦痛になれば食事をし、作業に疲れたら休息をとる、などのような反復するリズムに身を任せることは、幸福感さえもたらず「労働の恩恵」であるという [Va: S. 158/159頁]。他者の消費活動を助ける労働に従事する人は、他者が食事をして、睡眠をとり、身の回りを清潔に整えるという生命循環に関わることを助け、世話をしている。さらに、アーレントは、農作物、畜産物やそれを加工した食料品、

水やその他の飲料品は、すぐにそれを消費しなければ腐って無駄になってしまうものであるため、長く残らないという意味で非生産的であるとして、それらも労働によって用意されるものだと考えた。アーレントは非生産的な労働と区別して、生産的な活動に対しては仕事という概念を用いている。仕事は、生命維持に直接的に寄与するものではなく、道具を作り、建造物を建て、芸術作品を制作し、本を書いたりするような、世界に何か永続的なものを付け加える活動である。マルクスが重視した労働は、むしろこの仕事に近い。

アーレントによるマルクスへの批判は、労働の疎外を克服できると考えていたことに向けられている。資本主義的な生産様式の下から労働を解放できれば、疎外を克服できると考えたマルクスに対して、アーレントは、資本主義以外の社会関係の下でも、必然に応えることである労働は自由ではありえず、私たちは労働をしている限り疎外をまぬがれえないと考えた。もちろん、アーレントは疎外を防ぐために労働を止めるべきだとも言っていない。人間のニーズに応える活動である労働をしなくなるということは、生きるのをやめることを意味するし [Va: S. 154/155頁]、誰かを世話することもやめることになるからだ。さらに、アーレントは、もし他者のニーズを満たすことを強制されるということがなければ、労働をしている人たちも労働以外の時間を、世界と関わり、政治的なことのために使うことができると考えていた<sup>6</sup>。アーレントが、労働を人間の生命の条件として不可欠であると強調し、むしろ工場などではたらく生産的労働ではなく、消費に対応する非生産的なものに労働の原風景を見ていたことは、ケアの視点から考えると非常に示唆的である。

## 2) 公私双方の領域からの疎外をもたらす「世界からの追放」

アーレントの労働に対する評価は、両義的である。労働は生命にとって必要不可欠な活動であり、苦痛と快の循環の中で満たされる人間のニーズに応じる活動である。しかし、労働が不可欠だからといって労働中心の生活をすることは、公的領域からの排除を意味しており、その人から政治的な生が奪われているとアーレントは危惧している。アーレントは私的 private なことについて、それは政治的なものに関わることを「奪われている deprived」状態だと規定する [HC : p. 38/60頁]。アーレントにとってこの「奪われている」ことは、公的な場所で自分らしさを発揮することが妨げられている状態を意味している。しかし、アーレントは私的なものの中に積極的な役割も見いだしている [BPF: 183/251頁]。アーレントの私的領域とは、他者と親密な関係性を持っていることに留まらず、物理的に衣食住が満たされ、心身ともに安心できる居場所をもつことである。

贅沢や余暇をいくら享受しても、労働する動物がそれだけ「私的・<sup>フリヴァート</sup>欠如的」でなくなるわけではない。なぜなら、労働する動物は私有財産を剥奪されてしまっているため、皆に共通な世界から自分が守られ隠される場所を喪失しているからである [Va: S. 138/139頁]

上記の引用は、アーレント的な意味で労働を担ってきた奴隷や女性たちが、私有財産の主人ではないために、世界から自分が守られて隠される場所を失い、人間らしい生を送ることが困難な状況に置かれていることを非常によく表している。奴隷や女性たちは、私有財産の主人の生命を下支えしており、それによってその主人は私的領域で安心してくつろぐことができる。しかし、奴隷や女性たちの生命は誰にも支えられておらず、彼女たちは私的領域で暴力を含んだ強制的な力からの抑圧を受けて「労働」をさせられている。フェミニスト政治思想史家の岡野八代は、政治思想史において中心を占めている自律した主体像は、母親によるケアを「忘却」することで成立していることを明らかにした。子育てなどのケアをする人は、公的領域から排除されて私的領域でケアという重責を負っているにも関わらず、その存在を不可視化されてきた。「公的領域からの女性の排除／私的領域への女性の囲い込み」という従来の公私二元論批判では十分に認識できなかった女性たちの苦境を、公私双方からの排除として再定位した [岡野 2011: 138]。

下記のアーレントの引用からも、奴隷や女性たちが、私的領域つまり家の中で休みなく生命のニーズに応じる労働をすることの問題が垣間見える。「世界から追放」されているという強い言葉が使われ、奴隷や女性たちの脆弱性が非常によく表わされている。

労働する動物は、世界から逃避するのではない。そうではなく、世界から追放されて、他人には立ち入ることのできない自分の肉体の私的領域へ閉じこもるのである。[Va: S. 139/140頁]

このような脆弱な環境に置かれた奴隷や女性たちの苦難は、これまでの生産労働中心の労働論では描出できなかった。家事労働や世話の責任を負うことで生じる疎外とは、市場経済や政治から排除されるだけでなく、私的な場所からも排除される、つまり公私を含むこの世界のどこにも居場所を持つことが許されず、世界から追放された状態に置かれることである。そこでは、必ずしも愛しているとは限らない自分のままならない身体とその必要に向き合わされ、孤立させられる。それにも関わらず、時には他者のためにその身体をも差し出さなければならないのだ。奴隷や女性たちは、私的領域に閉じ込められていたのではなく、そこから

すら追放されていたのだ。

アーレントにとって公的領域と私的領域はどちらも世界に関係しており、世界の中で公的に活動し、世界の中に安心できる居場所を持つことは、人間が生きる上で重要である。そのため、世界から追放されるということは、公的領域と私的領域のどちらからも疎外されていることを意味する。このように、公的領域と私的領域、両方からの疎外を描き出すことができるところにアーレントの世界疎外論の真価がある。特に、本稿の文脈において、私的領域から疎外されるという意味での世界疎外は決定的な重要性をもつ。私的な領域で家事や世話をしながら誰かを守っているにも関わらず、自分自身が守られる場所は奪われている状態こそ、ケアする人の苦境の背景にあるのではないか。奴隷や女性たちのこの苦境は、長く主人から暴力によって強制されてきた苦難の歴史があることをアーレントは指摘している [Va: S. 140/141 頁]。アメリカ文学・文化理論研究者の新田啓子は、南北戦争前後の合衆国における南部を舞台にしたウィリアム・フォークナーの小説に登場する、自由な主人と家内労働を行なう奴隷の関係性の描写を分析しながら、家の中で使役労働をし、主人と密接な関わりを持ちながらも、決して主人から同胞とはみなされない奴隷が、「親密圏の内なる外部」に置かれていることを丹念に叙述している [新田 2020: 152-3]。残念ながら現在においても、私的領域の責任を引き受けて、誰かの安心できる場所を生まだしながらも、その恩恵からは疎外されており、その疎外そのものが忘却されることで成立している社会状況が、ケアする人の身に降りかかる苦境の背景に荒涼と広がっている。

## おわりに

本稿では、まずマルクス主義フェミニストによる無償労働論が近年、再評価されていることに注目した。マルクス主義フェミニズムは、これまで家庭の中で行われてきた女性たちのケアに関わる活動が、不払い労働であることを批判し、家長と資本からの二重の搾取を、女性に対する抑圧の根源に位置づけた。しかし、その後の理論的展開の中で、生産労働中心の労働概念から脱しきることが出来なかったために、ケアの諸活動が市場化されたあともその抑圧の影響を受け続けたことを指摘した。次に、ホックシールドの感情労働論は、マルクスの自己疎外をベースに対人サービス業務における労苦を疎外概念で捉えることを可能にしたが、その範囲は賃金労働に限られていたために、マルクス主義フェミニズムが蓄積してきた私的領域にひそむ資本主義に対して、批判的に向き合う力を希薄化させてしまった。最後に、アーレントの労働論と世界疎外概念を取り上げた。アーレントの労働論は、生産中心ではなく、むしろ消費とそれを助ける諸活動を主軸とし

ており、ケアを労働として捉える際に、マルクスの労働論よりも適していることを述べた。また、マルクスは労働者が、自身の労働によって生み出した商品やその利益から引き離されることを、自己疎外と論じた。この自己疎外論に対してアーレントは、労働における疎外を決定的に困難なものにしているのは、自分自身や自分のものとの乖離ではなく、むしろ世界から追放されて、自分自身の身体やニーズと常に対峙させられている状態だと論じた。アーレントの世界疎外概念は、ホックシールドの感情労働論では言い表すことができない、より経済的に脆弱な立場にあるケアする人の疎外についても扱うことができることを示した。特に、政治からの疎外という意味での世界疎外だけではなく、その人の安心できる居場所であるホームからの疎外も、アーレントが世界疎外論の射程に収めていることは、ケアする人の苦境を捉える上で非常に重要である。ケアする人の苦境について、アーレントの労働論と世界疎外概念を援用することで、公的領域からも私的領域からも疎外される、つまり、世界の中で活躍したり、居場所を持ったりすることができないという極めて脆弱な状態を、包括的に捉えられることを明らかにした。

念のために述べておけば、わたしはここで、ケアする人の状況を改善し、彼女たち／かれらが安心してケアに専念できることだけを目指しているのでは決していない。あの壁紙工場で働く少年の母親は、息子の状況を自分自身の経験を通して証言することで、同じような境遇にある人の労働環境を変えようとした。彼女は自分の力を、大勢の人の前で話すという「政治的」な機会の中で存分に活かし、後世にいたるまで世界中の聞き手に影響を与え続けている。環境破壊、金融危機、格差や差別問題など、現代社会が直面しているさまざまな課題も、ケアする人が実践の中で培ってきた経験や価値観を抜きにしてはもはや解決不可能である。ケアする人の経験や価値観が可視化され、世界の共通課題をともに解決していく社会の十全なメンバーとして政治的代表性を得ることは、新自由主義的な政策の下で擦り減らされていく人間の生を取り戻すためにも喫緊の課題である。本稿ではケアする人の苦境について中心的に扱ったため、ケアの営みのポジティブな面について十分に論じることができなかつた。今後の課題としては、アーレントの教育論や養育観を参照しながら、ケアを世界との関わりの中で捉えなおし、世界を支えるとともに、既存の世界を新しく生まれ変わらせる営みであることを明らかにしたい。ケアする人の世界疎外が真剣に受けとめられ、その非生産的な労働の負担を、押しつけることも、押しつけられることもなくなった時、この世界に生きるすべての人が尊厳に満ちた生活を送ることができるようになるだろう。

## 注

- 1 【凡例】 Hannah Arendtの著作からの引用は、原則として引用・参考文献で示した略号と頁数を本文中ないし脚注に記し、頁数は略号の後に「原文の頁数／邦訳書の頁数」という形で表示する。引用にあたって既刊の邦訳書を参照したが、必要に応じて訳語や訳文に一部変更を加えさせていただいたものもある
- 2 朝日新聞デジタル（2020年2月23日）「介護ヘルパー不足『国の責任』現役3人が危機訴え提訴」
- 3 「『家事』を『労働』と定義することは——それが使用価値の生産であれ交換価値の生産であれ——この概念がフェミニスト意識の形成にもたらした大きな貢献を割り引いても、不可避免的に「労働」という概念の持つありとあらゆる属性を分析の中に持ち込む。それはちょうど、近代人が自分の活動を労働としか見られなくなった限界を、そのまま女の領域に拡張することになった。」[上野 1990: 280]
- 4 [HC: p. 90/176頁, マルクス 1962 = 2005: 263-4]
- 5 アーレントは労働を生産的と捉える見方に批判的である [Va: S. 106/106頁]。本稿では詳しく展開することはできないが、生殖活動によって子どもが生まれることを、アーレントは生産物をつくることのように捉えない。アーレントは「出生」という概念で、子どもが生まれることはある種の奇跡のようなものであり、世界の中に新しい人が生まれてくることを、彼女の政治思想の中核に据えている [Va: S. 18/14頁, HC: p. 9/21頁]。
- 6 「労働する動物からその自然的な多産性を強奪するのは、人間の暴力なのである。そのような仕打ちを受けて時間と力の余剰を奪われることさえなければ、労働する動物といえど、世界のための自由のいくばくかを、労働と回復という生活の必要の合い間をぬって享受することが、自然なあり方として可能なのである」[Va: S. 132-3/133頁]

引用参考文献

Arendt, Hannah.

HC : *The Human Condition*. Chicago: University of Chicago Press, 1958. / 志水速雄訳 (1994) 『人間の条件』筑摩書房 (ちくま学芸文庫)。

VA : *Vita activa oder Vom tätigen Leben*. München/Zürich: Piper, 1994. / 森一郎訳 (2015) 『活動的生』みすず書房 (原著は1960年に出版)。

BPF : *Between Past and Future: Eight exercises in political thought (New and enlarged edition)*. New York: The Viking Press, 1968. / 齊藤純一・引田隆也共訳 (1994) 『過去と未来の間——政治思想への8試論』みすず書房。

欧文文献

Brown, W. L. (1988). *Manhood and politics: A feminist reading in political theory*. Totowa, N. J.: Rowman & Littlefield Publishers.

Federici, S. (2004) *Caliban and the Witch: Women, the Body and Primitive Accumulation*. New York: Autonomedia / 小田原琳・後藤あゆみ訳 (2017) 『キャリバンと魔女——資本主義に抗する女性の身体』以文社。

Himmelweit, Susan. (1995). "The discovery of "unpaid work": the social consequence of the expansion of work." *Feminist Economics* 1.2, pp. 1-19. / 久場嬉子訳 (1996) 『『無償労働』の発見——『労働』概念の拡張の社会的諸結果』『日米女性ジャーナル』、20巻、116-136頁。

Hochschild, Arlie Russell. (1983, 2012). *The managed heart: Commercialization of human feeling*. Berkeley, Los Angeles: Univ of California Press. / 石川准・室伏亜希訳 (2000) 『管理される心——感情が商品になるとき』世界思想社。

Honig, B. (2017). *Public things: Democracy in disrepair*. New York: Fordham Univ Press.

Kittay, Eva Feder. (1999). *Love's Labor: Essays on Women, Equality, and Dependency*. New York, London: Routledge. / 岡野八代・牟田和恵監訳 (2010) 『愛の労働——あるいは依存とケアの正義論』白澤社。

Luttrell, J. (2013). *Gender, alienation, and dignity in global slums* (Doctoral dissertation, University of Oregon).

Myers, E. (2013). *Worldly ethics: Democratic politics and care for the world*. Durham and London: Duke University Press.

O'Brien, M. (1981). *The politics of reproduction*. Boston, Massachusetts: Routledge and Kegan Paul.

Rich, A. (1979). *On lies, secrets, and silence: Selected prose 1966-1978*. New York: Norton & Company. / 大島かおり訳 (1989) 『嘘、秘密、沈黙』晶文社。

日本語文献

伊田久美子 (2015) 「女性学・女性問題における貧困・階層問題——フェミニズムと労働をめぐる」『大原社会問題研究所雑誌』、680巻、21-32頁。

—— (2017) 「新自由主義とフェミニズム——女性主体の視点から」『ジェンダー研究』(お茶の水女子大学ジェンダー研究所年報)、20巻、35-43頁。

—— (2019) 「労働としてのセクシュアリティ——再生産労働論の再検討」『女性学研究』、26巻、1-18頁。

上野千鶴子 (1990) 『家父長制と資本制——マルクス主義フェミニズムの地平』岩波書店。

岡野八代 (2012) 『フェミニズムの政治学——ケアの倫理をグローバル社会へ』みすず書房。

荻野佳代子・瀧ヶ崎隆司・稲木康一郎 (2004) 「対人援助職における感情労働がバーンアウトおよびストレスに与える影響」『心理学研究』 vol. 75, no. 4, 136-377頁。

- 佐藤和夫（2017）『＜政治＞の危機とアーレント——『人間の条件』と全体主義の時代』大月書店。
- ダラ・コスタ, マリアローザ（伊田久美子・伊藤公雄訳）（1986）『家事労働に賃金を——フェミニズムの新たな展望』インパクト出版会。
- ダラ・コスタ, ジョヴァンナ・フランカ（伊田久美子訳）（1991）『愛の労働』インパクト出版会。
- 新田啓子（2020）「依存者の詩学、あるいは耐え忍ぶ者の透視図」『思想』no. 1151（2020年3月号）岩波書店。
- 花岡智恵（2009）「賃金格差と介護従事者の離職」『社会保障研究』、45（3）、269-286頁。
- 益山未奈子（2018）「日本の保育士不足に対する賃金の影響」『保育学研究』、56（3）、45-55頁。
- マルクス, カール（城塚・田中訳）（1964）『経済学・哲学草稿』岩波文庫。
- （今村仁司・三島憲一・鈴木直訳）（2005）『マルクス・コレクションIV資本論第一卷（上）』筑摩書房。
- 吉田輝美（2014）『感情労働としての介護労働——介護サービス労働者の感情コントロール技術と精神的支援の方法』旬報社。

その他

- 朝日新聞デジタル（2020年2月23日）「介護ヘルパー不足『国の責任』現役3人が危機訴え提訴」<https://digital.asahi.com/articles/ASN2F4D7YN2BULZU001.html>（最終閲覧日2020年9月27日）

**Abstract**

# Carers and World Alienation

Kari Tsushima

This paper explores the predicament of carers using Hannah Arendt's labor theory and her concept of world alienation. A socioeconomic evaluation of care-related occupations-child care, elder care, assisting the disabled, and home nursing-has not been carried out even though caregiving is a vitally important occupation. The low wages carers earn have been criticized for the labor shortage in the field of social security. What makes the working conditions of carers vulnerable?

In this study, I rethink Arendt's labor theory to inquire into the background of carers' hardships. Marxist feminists argue that domestic work and childcare were exploited as unpaid work by the capitalist and patriarchal society of the seventies and eighties. Arlie Russell Hochschild's theory of emotional labor highlights the difficulties faced by workers in service industries such as cabin crews in the eighties. Both theories define care as reproductive labor, which is an extension of Karl Marx's productive labor. Arendt's labor theory is not centered on production, but focuses on consumption. I argue that Arendt's labor theory is more suitable than Marx's theory when we consider care giving as labor.

Moreover, I compare Marx's concept of alienation with that of Arendt. Marx argued that workers were not only alienated from the profit generated by the goods that they produced, but also from their own labor. He characterized the latter kind of alienation as self-alienation and argued that workers were excluded from the economic sphere. In contrast, Arendt's theory of alienation avers that workers were not only excluded from the economic sphere, but also from public and private spheres-politics and the home. These latter exclusions make laborers vulnerable. By re-reading Arendt's labor theory and her concept of world alienation, we can reconsider the predicament of carers alienated from both public and private spheres.